



第7340号

2021年9月15日(水)

# 大雨と共に生きる

防災システム研究所所長 山村武彦

## ◆「恐怖を感じる雨」が1.9倍増

地域気象観測システム(アメダス)の運用が開始された1976年からの10年間と、2011年からの10年間を比較すると、滝のように降る1時間雨量50ミリ以上の雨の年間発生回数は1.5倍、恐怖を感じるような同80ミリ以上の雨は1.9倍に増加している。

その結果、令和2年7月豪雨、令和元年台風19号豪雨、平成30年西日本豪雨、平成29年九州北部豪雨など、大規模な豪雨災害が毎年発生するようになった。記録的大雨はもはや特別事象ではなく、標準的気象現象と認識を改める必要がある。

今年も8月11~21日にかけての大雨で、各地の総降水量が軒並み1000ミリを超えた。広島、福岡、長崎、佐賀に特別警報が発出され、西日本から北日本までの広範囲で浸水・土砂災害が相次ぎ、甚大な被害を出している。

## ◆病院は「籠城」選択

佐賀県の武雄市と大町町(おおまちちょう)は、六角川の氾濫で町が水没した。2年前にも冠水した順天堂病院(大町町)は今回も最大1メートル浸水。同病院は鉄筋コンクリート造3階建てで、水禍に備え建設時(1999年)に敷地を1.5メートルかさ上げし、40センチメートルの堤防で囲った。

停電対策としては自家発電設備を3階屋上に3基設置し、断水時は地下水で賄えるようにした。食料と医療器材を3~5日分以上備蓄し、防災訓練は年6回実施。こうした周到な備えもあって、浸水時も食事や医療提供に支障はなく、入院患者ら182人も全員無事だった。

発災直後「順天堂病院孤立」と報道されたが、冠水時の外部避難は危険と判断し、2階以上への「籠城」を選択したのだ。翌日の夜になると周囲の水も引き、2週間後には外来受付が再開され平常を取り戻した。同病院は2メートル未満の浸水想定区域にあるが、今後も対策を強化し、同じ場所で医療・介護業務を続けていくという。町立病院が閉鎖され、高齢化が進む地域の町民たちにとって、同病院は心のよりどころとなっている。

## ◆2度の浸水も心折れず

2メートル以上の浸水想定区域や土砂災害警戒区域であれば、より安全地域への移転や、大雨時は早期立ち退き避難が原則。しかし、浸水想定が1メートル未満で流失・倒壊の恐れがなく、備蓄もあり安全が確保できるなら、冠水時の籠城(在宅避難)という選択は間違っていない。

8月豪雨で武雄市と大町町合わせて床上浸水が約1500棟に上ったが、人的被害はゼロ。豪雨災害を機に町を離れるという人もいるが、大部分の住民は今後も父祖の地に住み続けるという。

武雄市北方で2度の浸水被害を受けた食堂経営者の小路丸(しょうじまる)貴之氏(50)は、「自宅も一部漬かったが、警報が出たらまた畳を上げ2階に避難する。避けられないリスクなら、大雨・浸水と共存するしかない。この町が好きだからこれからもここで商売を続けていく。心は折れていない」と話す。

すべての人が住める絶対安全な場所はない。日本は国土の約75%が山地、そして約10%の洪水氾濫原に人口の約51%が暮らす。長期的にはダム・砂防堰堤(えんてい)・築堤・河川改修・整備と地域全体での流域治水が不可欠。一方、「大雨と共に生きる」と覚悟を決めた人たちに対し、将来計画だけでなく、実のある住宅再建支援や高床式住宅への改修資金の助成など、すぐできる現実的な対策の実行が今求められている。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003